アーカイブ新聞　（2015 年 6 月 18 日　第 830 号）

国立天文台・天文情報センター・特別客員研究員　中桐正夫

＊　東京天文台 100 周年記念誌資料－その 3-32-4（岡山天体物理観測所境界巡視写真）

筆者が引き継いだ東京天文台百年記念誌資料については、アーカイブ室新聞 346 号に「東京天文台 100 周年記念誌作成時の資料－その 1－」、349 号に「東京天文台 100 周年記念誌作成時の資料－その 2－」、353 号に「東京天文台 100 周年記念誌作成時の資料－その 3－」、という記事を書いた。これらの資料は段ボール箱 3 個に入っていたので 1 箱目を－その 1－、2 箱目を－その２－、3 箱目を－その３－とし、その内容のリストを作成し報告した。これらの資料についてリストのみでなく、内容を具体的に紹介する記事を書き始めたが、順不同で筆者が興味深いものをかってにピックアップして書いている。今回は 3 箱目の 32 項目の中の 1960 年（昭和 35 年）3 月 16 日に実施された岡山天体物理観測所敷地の境界線巡視の写真について報告する。第 353 号のリストには、

32. 横 A3 なめこ表紙でつづった岡山建設時のアルバムの一部

とあり、この中に敷地の境界線巡視の山歩きの様子を撮影した写真が 32 枚入っていた。岡山天体物理観測所の敷地面積は 531,840m^2 である。三鷹の敷地が同じ年次報告には 317,201m^2 とあるから三鷹キャンパスの約 1.7 倍の面積である。この敷地の境界線の角々に石柱が埋められており、それを辿って歩くのである。筆者が観測所に就職してからも 1 年に 1 回の割合でこの山歩きという境界線巡視が行われていた。岡山県南西部の山には毒蛇「マムシ」が生息しているので、蛇が冬眠中に行ったと記憶している。

写真 1 が出発の様子である。脚注に「3 月 16 日、境界廻り出発」とある。写真 2 の脚注には「No.1 杭より北側境界線を望む」、写真 3 の脚注に「No.1 よりドームを望む」とある。

写真 1

写真 2

写真 3

写真 1 には 8 人が写っている。判別できるのは石田、清水、矢野、田口、野口、乗本、中務の各氏である。先頭を歩く人の名前が分からない。写真 4 の脚注に「No.2 付近を歩く」とあり、先頭から矢野事務主任、中務運転手、守衛の田口、野口、乗本、石田の各氏が見える。写真 5 の脚注には「No.3 付近」とある。1 人遅れている太った石田五郎氏である。写真 6 の脚注には「No.4～5 間付近」とある。先頭を歩くのは長身の矢野十郎氏である。写真 7 の脚注に「No.4～5 の間付近より西（竹林寺山）を望む」、写真 8 の脚注に「No.5 付

近より竹林寺山を望む」、写真 9 の脚注に「No. 5 杭より東を望む」とある。この写真の様な石の杭と読んだ石柱が境界の角々に埋められている。

写真 4

写真 5

写真 6

写真 7

写真 8

写真 9

写真 10

写真 11

写真 12

写真 10 の脚注には「No. 6 付近より矢掛を望む」、写真 11 の脚注には「No. 8 の一寸手

前」、写真 12 の脚注には「No. 8 より西を望む」とある。

写真 13　　写真 14　　写真 15

写真 13 の脚注には「No. 8 より東を望む」、写真 14 の脚注には「No. 8 より旧道に上って昼食、谷間横断不能につき迂回」写真 15 の脚注には「前に同じ　昼食風景」とある。

写真 16　　写真 17　　写真 18

写真 16 の脚注には「No. 9 よりドーム及び竹林寺山を望む」、写真 17 の脚注には「No. 13 より矢掛を望む（北北東）」、写真 18 の脚注には「No. 14 水道ポンプ小屋　水は底にわず

写真 19　　写真 20　　写真 21

か有」と書かれている。写真 18 の水道ポンプ小屋は観測所の水道の水源の一つであり、「第一井戸」と呼ばれていた施設である。

写真 19 の脚注には「N25 より No. 26 を望む」、写真 20 の脚注には「No. 26 から No. 25 を望む」、写真 21 脚注には「No. 26 と No. 28 の間の斜面」とある。

写真 22

写真 23

写真 24

写真 22 の脚注には「No. 29 の 1 本松」、写真 23 の脚注には「No. 29 と 1 本松」、写真 24 の脚注には「No. 31 のカーブの木の杭、将来杭を打つ必要有」とある。

写真 25

写真 26

写真 27

写真 25 の脚注には「No. 38 の杭、溝は大門池への水路」、写真 26 の脚注には「No. 38 と 1 本松」、写真 27 の脚注には「No. 40 より No. 41 を望む、下　大門池へ降りる道」とある。

写真 28 の脚注には「No. 40、41 の間　大門池より No. 41 へ向かう」、写真 30 の脚注には「No. 44 より琴平参道を仰ぐ」とある。

写真 31 の脚注には「琴平参り 3 月 16 日」、写真 32 の脚注には「琴平さんよりドームを望む」とある。

1960 年 3 月 16 日の山歩きの写真は以上である。この写真の中に境界標識の石柱番号が出てきたものは、No. 1、No. 2、No. 3、No. 4、No. 5、No. 6、No. 8、No. 9、No. 13、No. 14、No. 25、

No.26、No.28、No.29、No.31、No.38、No.40、No.41、No.44 であり、No.44 が最後の石柱だったとして、No.7、No.10、No.12、No.15、No.16、No.17、No.18.No.19、No.20、No.21、No.22、No.23、No.24、No.27、No.30、No.32、No.33、No.34、No.35、No.36、No.37、No.39、No.42、No.43 がこの境界線巡視の写真には登場しない。だからといって、筆者がこの山歩きをした時には、一番元気なものが「しんがり」を務めるということで最後を歩いた。この登場しなかった境界標識石柱のチェックをしなかったとは言えない。矢野事務主任が構内の地図を持っている写真があるので、各石柱をチェックしたはずである。

写真 28

写真 29

写真 30

写真 31

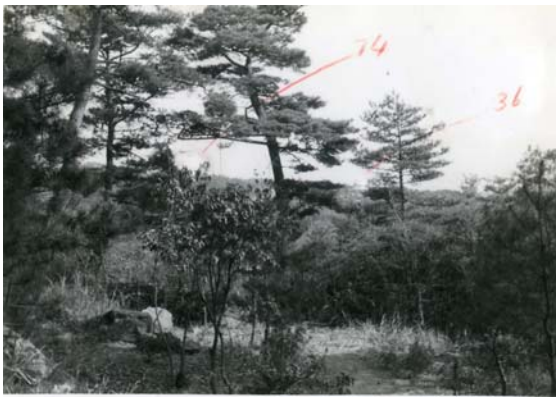

写真 32

写真 31 の「琴平さん」は 188 ㎝望遠鏡ドームの 300m ほど西方にあり、比較的近いのだが、宗教施設ということで観測所構内からは外されていた。

これらの写真は、矢野事務主任から三鷹への業務報告の一環として送られたものようである。この山歩きの写真の最後に昭和 35 年 3 月 12 日付の事務連絡のはがきが貼り付けてあった(写真 33)。このハガキを見ると、工事が 4 つの業者で行われていたことがわかる。石川島は機械としての回転するドーム工事、小針はレール取付とあるが何を担当していたか不明、大成は建築物としてのドーム工事であろう。

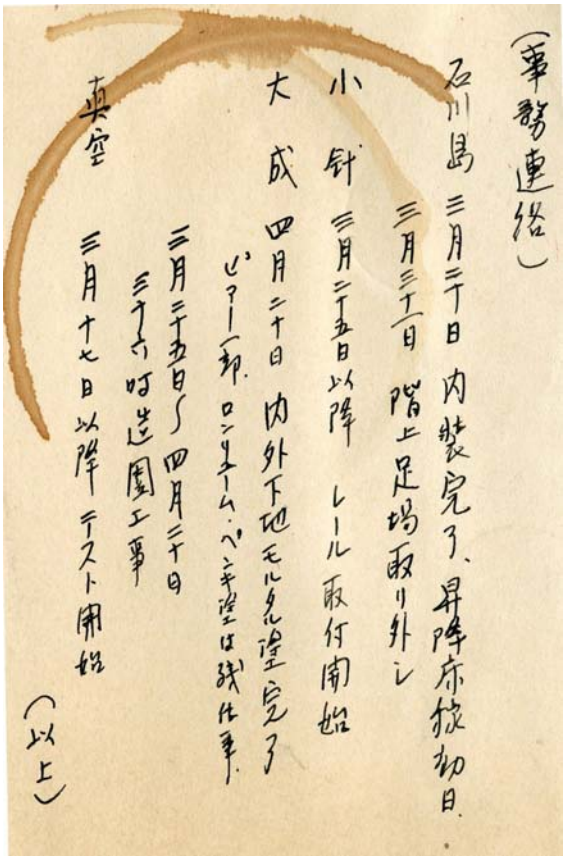
（事務連絡）
石川島 三月二十日 内装完了、昇降床撤去日
三月二十日 階上足場取り外し
小針 三月二十五日以降 レール取付開始
大成 四月二十日 内外下地モルタル塗完了
ビアー（邦ロンリーム・ペンキ塗は残仕事）
三月二十五日～四月二十日
三十六吋造園工事
真空 三月十七日以降 テスト開始
（以上）

写真 33

天文月報 1961 年 2 月号に、現場責任者であった石田五郎氏の「足場のとれる日まで」という記事があり、この中にこの山歩きについて次の文章がある。

「3 月中旬に、観測所構内敷地の境界を確認するために一同で殉死を行った。南の鴨方側は割合になだらかであるが、北の矢掛川は急斜面で道らしい道はない。境界石設置の監督をした A 氏の道案内で全行程約 3 時間で歩いたが、ヤブをこぎわけたり、岩をはって下りたりとなかなかの山路で、ここに思い石塊を運ぶのは大した仕事であったろうと感心した。」

この文章を読んで、この山歩きで 1 人名前の分からなかった人は、初代岡山天文博物館長であった青木さんと知れた。

これらアーカイブ新聞の記事にお気づきのことがあれば、編集者中桐にご連絡いただければ幸いです。中桐のメールアドレスは、arcnaoj@pub.mtk.nao.ac.jp